

今、なぜ、カナダが魅力なのか？

——『はじめて出会うカナダ』を刊行して

藤田直晴

記念事業の意義

私たちの身近で、テレビや新聞、またはインターネットなど、さまざまなメディアを通じて流されてくる膨大な外国情報の圧倒的部分は、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略称）関連のものか、紛争など問題のある地域や国々のものであり、カナダの情報に日常触れる機会は、よほどのことがない限り、ほとんどない状況にある。こうしたなかで、二〇〇八年から二〇〇九年にかけて、日加修好八〇周年を迎えるにあたり、天皇・皇后両陛下の初め

でのカナダ公式訪問など、日本とカナダの両国において、さまざまな記念行事が実施され、注目度が高まっているのは喜ばしいことである。

日本で、カナダ研究の中心的役割を果たしている日本カナダ学会も、諸機関と連携して、日加交流の記念事業を展開している。日本国外務省・明治大学カナダ研究所との共催で、この三月に、ラウンドテーブル「カナダにおける日系コミュニティと日加交流の促進」を開催し、カナダ各地の日系コミュニティの指導的立場の方々、日系社会の現状と課題について、幅広い意

見交換を行う場を設けた。母国文化の継承という意味では、多くのマイノリティ集団のなかで、日系社会の意識が弱体化していることが報告され、多文化社会における少数民族社会の有様と関わることから、参加者の関心が集中し、議論が進んだ。

また、二〇〇九年は日本カナダ学会創設三〇周年にもあたることから、六月に記念国際パネルとシンポジウムを、ジョナサン・T・フリード駐日カナダ大使、梅本和義外務省北米局長、納谷廣美明治大学長の参加を得て開催した。パネルIでは「多文化主義の現

実と挑戦」、パネルIIでは「人間の安全保障とカナダの経験」、シンポジウムでは「カナダ研究の軌跡——未来への展望」という、カナダの取り組みが世界的に評価されている分野をテーマに選定した。会員・大学院生・学部生・一般参加者など参加者数は延べで四六〇名にのぼり、フロアを交え、熱心な報告と質疑応答がなされた。この会議で、日本人のカナダへの潜在的な関心の高さを再認識する良い機会になったと感じている。

この九月の日本カナダ学会年次研究

大会（会場：国立民族学博物館）の際に、日加修好八〇周年・日本カナダ学会創設三〇周年を記念して、「アジア太平洋カナダ研究ネットワーク（PACZNCS）」を開催する。アジア太平洋地域のカナダ学会や大学院生との研究交流を通じ、カナダに関する理解や評価の共通性や相違性を浮き彫りにし、客観的なカナダ研究を構築する。場となれば、この企画は重要な意味をもつものになると考え、準備している。

カナダという国の特質

カナダは、移民の国として、アメリカとほとんど同じような国と考えられているようであるが、果たしてそうなのであるか？ カナダでは、連邦の公用語は英語とフランス語と定められているが、各州も独自の公用語を定めている。国家元首である英国君主の名代として総督が置かれ、各州にも副総督が置かれている。連邦と州を合わせて一一名の首相（連邦首相は Prime Minister、州首相は Premier

と呼ばれる)が存在するなど、強固な分権制度が確立されている。また、ケベックという「フランス的事実」を包摂しながら、歴史的に独立戦争を経験することもなく、国際政治のはざまに独立国家への道を歩んできたカナダは、独立革命を経て、巨大な軍事力をもつ超大国への道をひた走ってきたアメリカとは、多くの民族が共生する豊かな民主主義国という共通性をもちながらも、国の制度のみならず、理念も異なる、似ても似つかぬ国なのである。

対アメリカ関係という意味では、カナダと日本は、政治面のみならず、経済面や文化面でも、この巨大なブラックホールに、呑み込まれるのではないかという不安に絶えず直面しながら発展してきたという点で共通する。特に、カナダはアメリカと陸続きで国境を接しており、太平洋を挟んで接する

日本とは、同盟国として寄せるアメリカの期待感にも差異があるのは当然のことである。そうしたなかで、カナダが自らの利益と自主性を確保するために、血の滲むような努力をしてきていることを、さまざまな点からうかがい知ることができる。例えば、ベトナム戦争当時、ピアソン首相がアメリカ・テンプル大学で行った北爆反対演説がある。当時のジョンソン大統領は、もっとも信頼を寄せていた同盟国カナダに裏切られたという思いもあり、この演説に激怒し、カナダとアメリカの関係は悪化することになる。しかし、これが平和外交路線を展開するカナダの意気込みを示す例として、高く評価されるべき演説であったことは、その後の歴史が証明しているところである。

カナダは、大きな軍事力を保有することなく、例えば敗戦後の日本の国際社会への復帰、中国の国連参加などに先

導的役割を果たし、国連中心主義を旗印に平和外交を展開している国として、国際社会での評価は超大国を凌ぐものがある。

カナダは、日本にとって「宝の山」の国

日本カナダ学会の馬場伸也初代会長は、カナダについて、日本では決して手に入れようもない多くの「宝物」のある国と表現している。カナダという、まさに日本と好対照をなす国を知ること、私たちは、人間として、社会として、国として、"なに"を探し求めるべきなのであるか？カナダは、長い厳しい人種差別の歴史を経て、一九六〇年代以降、多民族・多文化共生社会の実現に向けて人類史的実験を繰り返りひろげてきている国である。この帰趨は、人類の未来さえも左右しかねないほど重要なものである。国内

的には、ゆるやかな連邦主義と分権社会、社会福祉・健康保険制度や労働法、歴史的に培われてきた寛容と妥協の国民性の形成など、地球上のほとんどの人種・民族からなる国民が力を合わせて、平和で平等の共生社会の実現を目指している。

対外的には、PKOなどの平和維持活動、対人地雷の規制や感染症対策などの人間の安全保障、国連における超大国独占を排除する機能主義外交、発展途上国への寛大な援助とそれらを支える政治的・社会的精神および組織な

ど、多くの分野で国際貢献を行っており、日本との協働により大きな成果を生み出す可能性が高い分野も少なくない。

長期的にみると、ある民族が排他的に特定の地域を不変的に占有し続けることはほとんど不可能である。このことは歴史的にすでに証明されている。多民族・多文化共生という大きな課題に、どの地域や国々も取り組まざるをえなくなるなかで、日本がカナダの経験を生きた教材として学習していく意味は大きく、これらはカナダの魅力の

源泉となっっている。反面、カナダがそれ相応の深刻な問題を抱えていることにも留意しておく必要があることを付言しておく。

カナダを総合的に理解するための手引書

グローバル化の伸展に伴い、地域研究が比重を高めてきている。世界のさまざまな地域や国を知ることが政治的にも、経済的にも、文化的にも重要となっけてきている。自然的・社会的に、日本と対極にあるカナダを理解するこ

とは、日本を知るための近道でもあ
る。

このことから、地域研究学会である
日本カナダ学会は、日加修好八〇周
年・日本カナダ学会創設三〇周年の記
念事業の一環として、『はじめて出会
うカナダ』を企画し、一年半の準備
を経て、このたび出版される運びとな
った。学会がこのような入門書を刊行
することについての評価は、さまざま
なされるところであろうが、各分野で
活躍し、自らもカナダと何らかしらの
出会い経験をもつ第一線の研究者によ
り、各章が分かりやすくまとめられ、
充実した内容を備えた地域研究の入門
書となっている。まさに、広範な科学
分野の研究者により構成されている地
域研究学会ならではの成果である。

本書は四つのパートからなる。第1
部は導入部分にあたり、カナダを知る
ことの魅力および世界座標上でのカナ

ダの位置づけが示される。第2部の九
つの章では、専門分野ごとに基礎知識
やデータが示され、歴史から文化まで
幅広くカナダについて学べる。第3部
の九つの章では、多文化主義や社会保
障、環境問題など、世界が直面してい
る主要な問題や現象へのカナダの取り
組みについて、可能な限り日本やアメ
リカを比較考察しながら、分かりやす
く解説している。第4部の五つの章で
は、巨大な国土を五つの地域に分け、
それぞれの州や地域の地理的多様性が
示される。文末の付録では、現代的な
試みとして、インターネットを利用し
てカナダを知るための手ほどきがなさ
れ、初心者にとって学びやすく組み立
てられている。これからカナダを本格
的に研究してみたいと考えている読者
にとって、巻末の参考文献リストは有
益となろう。また、コラムでは、文化
面を補足し、気軽に読めるように工夫

されている。

日本カナダ学会は、専門性の高い
『新版 史料が語るカナダ』（有斐閣）
を刊行しており、本書では、関連事項
を相互に参照できるように、本文中にそ
の都度指示し、入門から専門まで学び
たいという読者にとっても、満足してい
ただけるよう配慮・工夫をしている。

カナダ研究入門書として、本書が多
くの読者に幅広く活用していただけれ
ば幸いである。

（ふじた・なおはる 明治大学文学部教授）

日本カナダ学会「編」
『はじめて出会うカナダ』有斐閣刊
A5判、三〇六頁、定価二九四〇円（税込）